

咸宜園と洋学

杉本, 勲

<https://doi.org/10.15017/2235990>

出版情報 : 史淵. 105/106, pp.205-237, 1971-08-20. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

咸宜園と洋学

杉 本 勲

昭和四三年度より文部省科学研究費の交付をうけて開始した「近世日田とその周辺地域の総合的研究」において、わたしは他の若干の研究分担者とともに學術思想史班を編成し、そのB「咸宜園門下生の洋学」部門を担当して、その研究調査にあたった。本稿はその研究報告の一端であるが、種々の事情からいまだ共同研究の成果をまとめあげる時点には達していない。したがってこの報告は、わたくし一人の責任において行なうものであることをあらかじめ明記しておく。

一、は し が き

咸宜園門下生のうちで進んで洋学を身につけたものが幕末維新に近づくにしたがって、恐らく激増したにちがいないことは、充分に想像できるところである。それは時勢が急速に漢学よりは洋学を重要視するにいたったからである。そこではじめわたくしたちが咸宜園門下生の洋学について調査を企図したとき、幕末有為の青年で、広瀬淡窓・旭狂・青邨・林外等のもとで、咸宜園における課程を一応すませたのち、さらに医学・兵学その他の洋学部門に進路をもとめて、大坂・江戸・長崎等の地に遊学したものが、全門下生四千余人のうち相当数存在するとの想定のもとに、まず咸宜園『入門簿』をたよりに門下生の研究歴の追跡調査を行なうべく、フィールド・ワークを企図したことがあったが、四千人のすべてにわたって一々調査することは、いさぐちきわめて至難であり、史料探訪の面からもいたずらに労多くして功少ないことを知った。

しかし単に洋学を身につけたというだけではなく、すくなくとも翻訳書や関係著述をもつ知名の蘭学者もしくは英・仏・独などいわゆる幕末洋学者ということになると、その数はきわめて限定されてくる。咸宜園門下生のうちでそのような洋学者をもとめるとすれば、高野長英・岡研介・林洞海・武谷祐之・上野彦馬・大村益次郎・青木研藏・松下元芳らにすぎず、その他に相良善次・矢田淳・原田種臣・藤野玄洋等が蘭医として知られているくらいである。

ところで咸宜園と洋学との関係を考察する場合、淡窓・旭荘・青邨・林外等園主の洋学観ないしは坪井信道・伊東玄朴・緒方洪庵といった著名洋学者との交渉を吟味することも大切である。実は淡窓以来、同塾の教育方針自体が、当時としてはきわめて自由闊達で、儒学＝漢学を支柱としながら、時勢を達観して洋学にたいしても非常に寛大な態度をとり、志のあるものにはむしろ大いに奨励したと考えられるからである。そのような事情によるのであろう。広瀬家にはかなりの数の洋学関係もしくは対欧米関係写本類が現存しているし、咸宜園図書にも漢籍にまじって洋学関係刊本が若干残存している。それらの書籍とくに写本類は熟読された形跡が顕著であるから、これらが咸宜園と洋学との関係を物語る有力な鍵を提供することは、まちがいないと思われる。

以上申しのべたような見地に立って、本稿では(一)まず淡窓を中心とする咸宜園の教育方針をさぐり、それを通じて淡窓らの洋学観をうかがい、また著名洋学者らとの交友関係を吟味する。(二)つぎに門人中の前記洋学者の動向と淡窓らとの交渉を調べ、(三)最後に広瀬家所蔵の関係書類(主として写本)を検討し、門人らの編著にもスポットをあててみたいと思う。

二、広瀬淡窓の洋学観

咸宜園における広瀬淡窓の教育方針については、かれ自身「学則」・「規約」・「告諭」・「申聞書」等に明記しており、その教育の根本の理念が「約言」の敬天説であることについては先学の考証もいくつか出ているので、ここでは繰り返ささないが、『迂言』にのせた「学校ノ制」³⁾によると、まず学を「文武ノ両学」に大別したうえ、文学を細分して、

文学ニテハ。経学。歴史学。諸子学。文章学。兵学。医学。天文学。和学。職原学。蘭学。書学。数学。諸礼学ナト。一切文字言語ヲ以テスル事ノ。国用ニ供スヘキコトハ。皆教官ヲ置キテ。科目ヲ分チテ研究スヘシ

と記し、当代の「実学」の大部分を網羅しているのである。蘭学のほかに兵・医・天文・数の諸学を羅列しているが、医に本草、数に測量を加えれば、当時まだ漢学系統の諸実学が残存していたものの、それらがすでに蘭学の主要科目になりつつあったことは、すでによく知られていたから、淡窓もその含みをもって教科目に掲げたものと思われる。

そこで淡窓のそうした学問観を『約言或問』第二十「学ニ科目ヲ分ツノ弁」⁽¹⁾についてみると、

古ヘ専門ノ学ト言フコトアリ。コレ極テ良法ナリ。但シ古ノ専門ハ。六経ノ一部ツ、分チテ研究スルナリ。我カ所謂専門ハ之ヲ他事ニ推広ムルナリ。喩ヘハ当時諸侯ノ内ニモ。大国ノ儒官ノ二十人モアルヘシ。其内ニテ科ヲ分チ。経術家・歴史家・文章家・天文学家・和学家・軍学家・蛮学家ナト言フヤウニ定メテ。事多キ科ハ。一科ニ数人ヲ用ヒ。事少キハ一人ニテ二科ヲ兼ヌルモアルヘシ。総テ当時ノ学ハ科目ヲ分ツコトナキニヨリテ。人ノ知りタルコトヲ我知ラサレハ恥ニナル故ニ。競テ同シ路ニ走ル。故ニ我カ知ラヌコトハ人モ知ラス。人ノシリタルコトハ我モ知ル。儒者百人アリテモ。一人ト同シコトナリ。今科目ヲ分ツニ於テハ。己カ科ニ非ルコトハ手サ、ヌ様ニスヘシ。喩ヘハ経術家ハ文章ヲ能クセストモ。恥ツルニ及ハス。歴史家ハ天文ヲ知ラストモ苦シカラス。唯己カ科内ニ暗キコトアレハ恥トス。コレ天職ヲ重スル所ニシテ。即敬天ノ義也。如此スレハ学者ノ身分閑暇ニナル也。於レ之万事ニ広ク手ヲワタス也。和学蛮学軍学ナトハ。今ハ儒者ノ与ラヌ事ニ成リタレトモ。右ノ如クスル時ハ。儒家科目ノ一端ニ備ヘテ。是モ学校ノ内ニ具フル様ニナル也。其外ニモ国用ニ立ツヘキコトノ。文字言語ヲ以テスル程ノコトハ。残ラス科ヲ立テ穿鑿スヘシ。或ハ国初以来。政務ノ旧規。或ハ人君之作事。或ハ日本ノ地理風土ナト。皆研究スヘシ。○中如此スレハ。学問国用ニ立ツ也。当時ノ学問国用ニ立チカヌルコト。兼テ科目ノ分チナキ故ニ。儒者ニ非ル者マテモ。心ニモアラヌ素読講釈等ニ隙ヲ費シ。数年ヲ歴テモ格別成就スルコトモナシ。○中名々己カ好ムコト而已ヲ專一ニスレハ。略

其筋ニ達人出来テ。大ニ国家ノ光トナルヘキ也。

とあり、儒者にありがちな偏狭な学問観から解放された自由闊達な淡窓の学風を端的にしめしている。ここでは蛮学＝洋学も天文学・軍学などをふくめて、堂々と市民権を獲得しており、専門家↓達人の出現が期待されているのである。

なおかれの洋学観をうかがう一資料として『懐旧楼筆記（卷二七）』の文政十一年（一八二八）シーボルト事件の判決を耳にしたときの論評をあげることができる。それは断罪によって「専ラ彼国ヨリ我邦ヲ襲フ謀アル様ニ申シ沙汰」した風評にたいして、シーボルトと蘭学を弁護したもので、「是全ク兒女俗人ノ見ナリ。総テ彼国ノ学問ト言フハ。格物窮理ヲ主トシテ、天地間一物不レ知ヲ以テ憾トス。故ニ我邦ノ事ヲ搜索スルモノニシテ、姦謀邪計アルニハ非ス」と断じて、蘭学の本質と西洋人の学問にたいする厳しい態度を的確に指摘しており、暗に幕府の蘭学（者）弾圧を非難しているのである。シーボルト事件の断獄については、淡窓の愛弟子岡研介にあてた年月未詳（多分文政二年ごろ）正月十八日の書簡にも⑥「蘭人一件も一切片付キ至而事状軽ク聞之大慶存ル。蘭学衰微之端ニハ相成申間敷ヤト大ニ致懸念ル処安心之至ル」と記し、弾圧が蘭学衰退の原因になりはしまいかと憂えていることをつけ加えよう。

つぎに淡窓と著名洋学者との関係の吟味にうつろう。その第一は坪井信道であるが、かれについては『懐旧楼筆記』卷十六、文化一二年の条に、

尾州ノ医生ニ坪井環ト言フ者アリ。三四年來。三松斎寿カ家ニ寄寓シテ。医ヲ学ヒ。常ニ余カ家ニ來往セリ。極メテ才氣アリ。志願アルモノナリ。此ノ年ノ冬。当驛ヲ辞シ去リシカ。其後モ兩三度來遊セリ。此ノ人後年東都ニアリ。称ヲ改メテ信道ト言フ。蘭学ヲ唱ヘ。当世ノ一名家トナレリ。余カ門人医ヲ学フ者、往々其門ニ入レリ。

と記し、信道が江戸に出て有名になり、伊東玄朴・戸塚静海と当代蘭医の三大家と称せられるずっとまえから、両者の間には親交関係があったことを物語っている。さらに前記『書翰集』には坪井信道・伊東玄朴より淡窓・久兵衛（淡窓の弟）・三右衛門（その弟）の三名にあてた弘化二年六月十二日付の長文の書信⑨がのせてあるが、これは志を立てて江戸に出た旭

狂が、塾生もおいおい増し、名声が次第にたかまりつつあるのにもかかわらず、不幸続きのため淋しく同地を引揚げようとしていたのを、信道と玄朴が、何とか江戸に引きとめようと策して兩三年の内には大発展をされるに違いない、それを中絶させるのは何としても惜しい、帰国の儀は一兩年見合わせては如何と懇切を尽した書状である。實際旭荘と信道との間に無二の交際があったことは、旭荘の日記(『日間瑣事備忘録』)にさかんに出てくる記事によって察知できるが、ここでは省略する。

とにかく広瀬家と坪井家とは、以上の如く淡窓・久兵衛・旭荘と信道との間に親交があり、そのため淡窓は寵愛する門人岡研介を信道の門弟として蘭医方を学ばせ、一方信道はその長子信友を旭荘の門にいられているのである。肥前神崎出身の伊東玄朴と旭荘との間柄も前記の書信で想像がつくが、『日間瑣事備忘録』天保十四年八月十九日の条には旭荘が玄朴の屋敷を訪れて酒食の饗応をうけたことが記されてある。

ところで淡窓と洋学者との交友關係をもうすこし吟味すると、近くでは筑前に門人武谷祐之の父武谷元立と百武万里がいて、いずれもシーボルトに教えをうけた蘭医であるが、淡窓が天保一三年(一八四二)博多に遊んだとき、この両洋学者に面接し、万里には淡窓の門生をその門弟として託している。つぎに長崎の高島四郎太夫(秋帆)との關係も密接で、天保一二年(一八四一)淡窓が下関方面に旅したさい、たまたま江戸より長崎への帰路、同地に館した秋帆を、訪れているが、『懷旧樓筆記』のそのときの記事に「余、四郎太夫ト書信往復スルコト二十年。交義頗ル熟セリ。然レトモ。面會ハ此度ヲ以テ始メトス」^①とあり、つづいて秋帆が砲術の事をもって幕府より褒賞をうけたことを叙したあと、「四郎太夫ハ極メテ若クシテ礼アル人ナリ、其言ニ曰ハク。小子先生ニ業ヲ承ケストモ、実ニ師ヲ以テ事フルノ志ナリト」と、そのひととなりと淡窓にたいする立場を位置づけている。そして上欄に秋帆が天保十三年(一八四二)讒訴により投獄された事件について「九老之有秋帆。前後一人。惜哉。大福不_レ及_レ旋_レ踵而陷禍」と同情をよせているのである。

つぎに淡窓は京都の蘭学の大家で小石元俊の子元瑞(拙翁)とも親交があった。『懷旧樓筆記』天保一六年九月六日の

条をみると、「京都ノ小石拙翁来見タリ。門人小森宗治・龍野成二従ヒ来レリ。予カ門人内山肩吾。当時小石カ門ニ学ヘリ。此度導ヲ為シテ来レリ。宴ヲ設ケテ之ヲ饗ス」とあり、二人はたがいに漢詩を交換している。さらに七日の条には「予自ラ小石カ旅館ニ至ツテ謝ス。拙翁カ父元俊。独嘯庵ノ門人ニシテ。南溟先生ノ親友ナリ。京撰ニテ。始メテ蘭学ヲ唱ヘテ。一世ノ名家タリ。拙翁初ハ元瑞ト称ス。能ク父ノ業ヲ継ケリ。予カ門人。往々其門ニ入ル。茂・春安・勲平・肩吾カ輩。是也。此度ハ久留米侯ノ招ニ因ツテ来リ。今洛ニ帰ルナリ。其言ニ曰ハク、日田ニ過キルコト。淡窓翁ニ見エ。且耶馬溪ヲ觀ンカ為ナリ。帰郷ノ後モ。数度書ヲ応復セリ」と記している。このように元瑞の父元俊と淡窓の師亀井南冥とが同門の親友であった関係から格別の好誼を結び、淡窓は門人数人を元瑞のもとに送っているのである。しかし淡窓は元瑞を文人として評価していたことは、やはり七日の上欄に「拙翁業雖ニ方技ニ。名列ニ文苑ニ。此行帰レ家。無レ幾而歿。可レ惜。」と記しているところから察せられよう。

以上、広瀬淡窓と坪井信道・伊東玄朴ら当代一流の東都洋学者や、筑前の武谷元立・百武万里、長崎の高島秋帆、京都の小石元瑞など各地の知名洋学者との交友関係を検討した。このほかにもなお精査すれば、たとえば緒方洪庵・鈴木春山等何人かの該当洋学者があると思われるし、日出藩の家老でかつ漢詩人でありながら、洋学にも造詣の深かった帆足万里と淡窓との親交も知られている。いずれにしても淡窓が、このように高名な洋学者とも隔意なく、親密な関係をもったのは、一部の固陋な漢学者とはちがって、前記のごとく、洋学を自己の信奉する漢学と対立させることなく、その自由闊達な学風から、むしろ時勢に照して洋学の窮理性の優秀さを認めてこれを尊重し、洋学の興隆を期待したためであろう。しかしまた逆に淡窓はすぐれた洋学者らと接触することによって、海外事情や洋学への認識を深めえたこともみのがしえない。

こうした親交関係をふまえて、淡窓は咸宜園で漢学の一応の課程を了えたいうえで、さらに洋学学習を志願する門人を、高名の洋学者のもとにおくって医学・兵学等当代緊要な実学を専攻させたが、このようなやり方によって学問交流のいく

つかのルートを形成することができた。咸宜園出身の多くの有為の士が、幕末から明治にかけて各方面で活躍したが、それにはこうしたルートの形成もあずかって力があつたと思う。いずれにしても淡窓のこの教育方針は、漢学から洋学への転換期における、まことに興味ある事例を提供するものといえよう。

註

- (1) 学則は『淡窓全集』に収録されていないが、中島市三郎『教聖広瀬淡窓』に全文を掲載、「規約」、「告諭」は『全集』巻中のせてある。
- (2) 小西重直『広瀬淡窓』(『日本教育先哲叢書』巻一〇)・角光嘯堂『広瀬淡窓の思想と教育』・中島市三郎前掲書等参照。
- (3) 「迂言」(『淡窓全集』巻中所収) 三九頁。
- (4) 「約言或問」(同右所収) 二二・二四頁。
- (5) 「懐旧楼筆記」(同右巻上所収) 三五〇・五一頁。
- (6) 『広瀬淡窓旭莊書簡集』四三頁。
- (7) 「懐旧楼筆記」(『淡窓全集』巻上所収) 三〇一頁。
- (8) 坪井信道は美濃国池田郡脛長村の出生であるから、「尾州ノ医生」は何かの誤りであろう。なお信道の伝記については中野操『蘭学界の先覚者坪井信道』(『日本及日本人』昭和四五年五月薫風号、所載)を参照。
- (9) 前掲『一書翰集』三五・三八頁参照。
- (10) 『懐旧楼筆記』(『淡窓全集』巻上所収) 五九七、五九八頁参照。
- (11) 同右、五七九頁。
- (12) 同右、七四七・七四八頁。
- (13) 『儒林評』(『淡窓全集』巻中所収) 一三頁に、長門の永富独嘯庵に従って医を学んだとある。
- (14) 『懐旧楼筆記』(『淡窓全集』巻上所収) 七四八頁。
- (15) 元瑞は嘉永二年(一八四九)二月十日死歿。

三、咸宜園門下の洋学者

咸宜園か広瀬家先賢文庫を訪れると、まず門人番付表に目がつく。番付の第一段には、高野長英をトップに大村益次郎・岡研介・武谷祐之・上野彦馬等の洋学者が長三州・谷口藍水等の漢学者とともに名をつらね、第二段に旭莊・青邨・林外らが、中島子玉・大隈言道らの上にならんでいる。第四段になって、松田道之・清浦圭吾・横田国臣ら明治以後に活躍する逸才が位置しているのである。この番付からみても咸宜園では洋学者が非常に高く評価されていたことがわかる。

なおこのほかにも林洞海・松下元芳・矢田淳・青木研蔵らも番付にこそおのっていないが、いずれも洋学史上にその名をとどめた人物である。これらのうち高野長英・大村益次郎はあまりにも有名であり、林洞海もちに幕府の侍医や西洋医学所の教授になった人、青木研蔵はシーボルトの教えをうけ、兄青木周弼と力をあわせて長州藩の洋学興隆に貢献し、とくに種痘の普及につとめた。¹⁾

しかしながら『懐旧樓筆記』その他の著述や書簡にその事蹟がのり、淡窓が格別目をかけたと考えられるのは、いまのところ岡研介・松下元芳・矢田淳・武谷祐之・上野彦馬の五人のようである。もともと高野長英は淡窓の高弟にはちがいないが、文政十一年（一八二八）のシーボルト事件当時、しばらく咸宜園に身をよせただけで、他の門人とは別格であった。淡窓は長英の人物の群をぬいて傑出していることは充分看破し、「吾門下数千人中、一飯の間も国を憂ふるを忘れざる者は、其れ高野長英か」と歎称したと伝えられる。²⁾大村・林・青木等については、淡窓との関係は未詳であるが、今後未整理の広瀬家所蔵の書簡類（約一万点）を精査したあかつきには、種々の新事実が発掘されるのではないかと期待される。右のような事情から、ここではとりあえず、岡・松下・矢田・武谷・上野（入門年代順）と淡窓との師弟関係をすこしくうかがってみる。

(一) 岡研介

寛政一一年(一七九九)周防国熊毛郡平生村に生まる。文政二年(一八一九)四月一三日三松斎寿の紹介で咸宜園に入塾したが、その前後に福岡の亀井昭陽のもとにも師事した。淡窓は研介の才学を称揚し、中島子玉・僧圭とあわせて咸宜園三才子の名をあたえた。その間淡窓は江戸の坪井信道のもとへ研介を入門させ、蘭医方を学ばせている。文政六年(一八二三)シーボルトが来日し、翌年鳴滝塾が設けられると研介は早速長崎に遊学したが、シーボルトは研介の才能を愛し、長英とともに最初の塾頭とした。一〇年には萩の豪商熊谷五右衛門の依嘱により長英と『蘭説養生録』を共訳、またそのころ貝原益軒『大和事始』を蘭語で抄訳し、シーボルトに提出している。翌一年シーボルト事件がおこるが、研介はこの事件からどんな影響をうけたであろうか?、『日本洋学編年史』天保元年(丑)には「シーボルトの獄起りし時、研介は己に長崎を去りて豊後の日田に到り、広瀬淡窓の門に学ぶ。故に其の難を免る」と記し、同書天保一〇年(巳)には「シーボルト事件に入獄したるが原因にて、晩年、幻覚的精神病に罹りて(年四一にして一杉本註)遂に斃る」とあり、前文によればこのとき咸宜園に入門したごとくであるが、これは誤りである。また後文によれば事件に連坐して所罰をうけたことになるが、これについては「懐旧棧筆記』文政一二年二月のシーボルト事件について叙した項に

余カ門人岡研介。長崎ニ在ルコト数年。吉雄忠次郎カ兄權之助カ弟子トナリ。又親シク失勅児(シーボルト一杉本註)ニモ從ツテ。蘭学ヲ研究シタリ。コノコロハ。長崎ヲ去ツテ。赤馬関ニ客タリシカ、長崎大尹ヨリ急ニ召サル、コトアリテ。彼地ニ赴ケリ。世上ニテハ。皆蘭医ノ事ニ坐セラレタル由。専ラ沙汰セリ。是伝聞ノ誤リナリ。研介カ召サレタルハ。禁書ノコトニヨレリ。此比長崎ニ他邦ヨリ来学ノ書生アリ。三山論学記ト云フ書ヲ読居タリ。是ハ明末西洋ヨリ来リシ艾儒略カ所著ニシテ。天教ノ事ヲ申セシモノナリ。聖堂ノ教授向井某其事ヲ官府ニ訟ヘタリ。因ツテ書生ヲ執へ、詰問アリシニ。研介ヨリ借用セシ由ヲ申ス。研介モ亦人ニ借リタルナリ。研介已ニ崎ニ到リシニ。彼地親識ノモノ教ヘテ曰ハク。必ス書ノ主ヲ明スコトナカレ。左スレハ。連累ノ者多クナリ。其禍ハカルヘカラス。唯古物市ニテ買ヒタリ。未タ見ルニ暇アラスト答フベシト。研介大尹ノ前ニ出テ。右ノ如ク答ヘテ事スミ。書ハ焚棄ニナ

リタリ。実へ忠次郎高橋氏ヨリ私ニ借用セシ由ナリ。高橋ハ秘書監ヲ兼ネタリ。故ニ秘府ノ書ヲ取出セシトシ。⁷⁷
 と、シーボルト事件に連坐したとする伝聞の誤りを訂正しているのである。ところでこの禁書目にふくまれている艾儒略（Giulio Aleni）の教義書『三山論學記』には淡窓もいたく興味をしめした。それは研介にあてた年次未詳（おそらく文政後半、研介長崎滞留中）の五月廿九日付書簡に、藥品恵投の謝礼につづいて、「三山論學記久々留置不堪感荷候。騰写相濟候而此節市右衛門へ託御返呈申候御入手可被下候己克篇辱落手仕候是へ今暫拝借奉願候以御蔭珍異之品及寓目之段重疊感佩仕候」と記していることから察せられる。このように淡窓が西洋思想文化の一流流たるキリスト教にたいして注意をおこたらず、禁制をおかしてまでも『三論山學記』や『己克篇』に目をおしている学的熱意は、当代の他の学者にもその例はみられるけれども、充分特筆に値すると思う。

さてしばらく淡窓のもとで薫陶をうけた岡研介はおそらく文政一二年の某日、大志をいだいて江戸にむかって日田を出立するが、そのとき淡窓は送別の一文を草して研介の行を壮にした。少々長いがその大体を抜書きする。

送岡子究一序

岡子究豈不誠豪傑之士哉。其於學也篤。信所聞而固執之。行事質直而方。言論明白。如日月皎然。文辭雄健富胆。如江河沛然莫之能禦。求諸當世人。未見其比也。子究山陽之人。西遊我党有年。及其東歸。請言於予。予曰。○中今子究東歸。有講業於大都會之志。扼天下之凶書。交海內之英俊。其益広哉。且其齒未也。中年所詣未可量也。○中抑此可為子究一言。難為衆人一言也。子究往哉。想二十年之後。我再見子究。非洛之表。則墨之泔矣。握手論心。以及往日耶。及其行事。輒蹙然曰。少年客氣。久而自悔耳。及其所著述。輒幡然曰。未成之業。既附諸炎火矣。於是乎果知子究之為豪傑一矣。

淡窓が研介の人物と學問にどれほど惚れこんでいたか、おそらく師が門人に贈る至情、これに過ぎるものはないのではないかと、一読胸を打たれるものがある。なおこのほか淡窓の詩集『遠思樓詩鈔』（卷下）には、研介の長崎遊学のさい

に贈ったと考えられる「寄岡子究」なる漢詩一篇があり、また『文稿拾遺』には自著『日新録』を贈ったさいの「与岡子究書」がのせてあり、研介によせた淡窓の愛情の深さがしのばれるが、これらは割愛しよう。江戸へ向って日田をあとにした研介は大坂で当時一流の蘭方臨床家であった斎藤方策にひきとめられ、その女を娶って、この地で医業を開いた。ときに天保元年（一八三〇）であった。翌年には A. B. Richerand の『生機論』を訳述、刊行しているが、その翌三年には周防岩国藩に招かれて医員にあげられた。しかしシーボルト事件以来、研介は神経をひどく労したものとみえ、大坂に定住してからとかく健康を害したので家郷に近い岩国に移つたらしい。しかしこの地で精神病にかかり、平生に帰つて天保一〇年（一八三九）十一月三日歿した。¹²

淡窓はその死をいたみ、囑されてつぎのような墓誌を書いた。

岡子究墓誌

嗚呼此岡子究之墓耶。余欲作_レ之銘。而無_レ禁_ニ於我涙之先_一也。子究姓岡。名研。子究其字。研介為_レ稱。周防平尾人。家世業_レ医。子究幼而穎敏好_レ学。志在_ニ大成_一。与_ニ友人坪井信道相謀。以_ニ荷蘭医方。未_レ弘_ニ於本邦_一。欲_レ興_ニ其說_一。師_ニ芸中井氏。肥吉雄氏_一。又親從_ニ蘭医_一。窮_ニ究精微_一。於是欲_レ有_ニ所_ニ著述_一。学_ニ文於予及筑龜井氏_一。既而講業浪華_一。声誉日隆。不幸得_レ疾。帰臥郷里。蹇連多年。齋_レ志而終。嗚呼坪井之名。今頃_ニ海内_一。而子究託_ニ一片石_一。以伝_ニ不朽_一耶。若使_ニ子究得_ニ志於年_一。則著述之富。生徒之衆。將_レ耀_ニ百生_一。又何待_ニ予文_一邪。顧_ニ予之文。果足_レ使_ニ子究不朽_一耶。子究娶_ニ齋藤氏_一。生_ニ一女_一。寿四十一。以_ニ天保己亥十一月三日_一卒。¹³

略

若くして逝いた愛弟子をいとおしむ心情がほとばしっているが、文中、友人坪井信道と謀ってオランダ医方がまだわが国に普及していないのをなげいて、その法を興そうとしたとあるのは、かつて信道の門に遊んだ研介と信道との交際が緊密で、両者の間に同志的な結合があったことを指している。それは天保元年一月一〇日付で信道より研介にあてたつぎの書信によつてもたしかめられるので、参考のためにかかげておく。

九月二日之貴書、十月廿八日相達、薰誑仕候。云々、然者尊兄浪華永住御決定之旨、一々不_レ得_レ已_レに出づる趣、逐一御尤もと存候。併し小子に在りては失望に御座候。過日愚意の程申上げ、定めて御披見被_レ下候と存候。江戸洋学家無数御座候得共、多分、山師俗子而已。一も取るに足_レ不_レ申、在職有力之中にも、大いに其説に心酔する者往々御座候得共、何分、肝心之学者に出群之人無_レ之、唯々一時の虚名と小利を貪る鼠輩のみにて、道欲_レ行_レ而不_レ行、有志之士は不堪_レ忿懣_レ候。此時、正心誠意之学士、興起せば、必ず千載之俗習を一洗して実学を一定せん事疑なし。宇田川老人は著書を以て天下を導く了簡にて、一向、療治も教授もせず、藤井方亭は官事忙しく、殊に大志も無_レ之、湊は一個之流行家とならんと欲し、滝野は病後にて雄志難_レ立、且速_レならん事を欲し、青地は陰逸を愛し世味を厭ひ、教授も不_レ好唯自家からの読書に兀々たる耳。大都の中央に出て赤幟を立て、四方士を待つといふ人無_レ御座_二候。不堪_レ長_レ大_レ息_二候。當時、教授斗りも仕居候は小子一人なり。此節塾生八九人と研究仕候。尤も不才無術、捷快之事は無_レ之、口惜しき次第に御座候、今度、浪華御永住之貴書拝見、忽然_{トシテ}西帰之念起_リ候得共、宇老人の勸諭にて相止_メ申_シ候。此後、千里を隔_テ候とも御賢顧奉_リ仰_キ候。

二陳、昨夜、玄朴宅にて高野長英に面会致_シ候。放蕩を絶ち、書生を教授し、大都を一震可_レ仕_ル由、申し居り候。何卒如_ク言あれかしと窃かに窺_ヒ居_リ申_シ候。十一月十日、坪井信道。

よほどの信頼感がなくては、こうした人物評までできないと思う。ここでは宇田川榛齋・藤井方亭・滝野玄朴・青地林宗・高野長英など錚々たる東都の蘭学者が、かたはしから組上にのせられているのである。

研介は達眼の先輩蘭学者によりこのように期待され囑望されていたのであるが、そのすぐれた才能を存分に發揮した著述はのこしていない。従来知られている蘭書反訳は前記『蘭説養生録』と『生機論』だけである。ところが今回私たちが広瀬家所蔵文書を調査中、はからずも岡子究著『療痔録』上下二冊を発見した。これについては章をあらためて吟味を加えたい。

(二) 矢田 淳

『入門簿』¹⁵によれば、豊後国速見郡別府の出身、文政一二年(一八二九)一月一六日一六才で釈、鉄山の紹介により咸宜園入塾とあるから、生まれは文化一一年(一八一四)ということにならう。淳の父連も文化一二年に入門していて、『懐旧楼筆記』文化一二年正月の条に「矢田連ハ別府ニアリテ医ヲ業トス。後年其三子。淳。孝治。希一。皆予カ弟子トナレリ」¹⁶とあり、さらに淳の長子宏も安政七年(一八六〇)青邨の園主時代に入門しているので、親子孫の五人までが咸宜園に学んだわけで、これは他にほとんど類例がない、『淡窓旭狂書翰集』には、淡窓から矢田家にあてた手紙が七通ほどのせてあるが、いずれも挨拶状程度をでない。

ただ同書の註には「矢田淳字子朴、号柳村、文政十二年入門、後長崎に遊びシーボルトに蘭法を学び、別府北町に開業、一旦医院を弟孝治に附し大坂緒方洪庵に学ぶ。安政五年コレラ流行、時に淳大坂にて蘭医のセニテンハムに虎病の治療を学んで居たので、別府に一人の死を出さなかつたという。明治三年五十七で歿した」¹⁶とあるが、文政一二年の入門後、長崎でシーボルトに蘭医方を学んだというのは誤りであろう。なぜなればシーボルト事件の発生は文政一一年の秋で、それ以後シーボルトは一年間長崎の出島蘭館に拘束されていて、とても門弟をとることなどはできなかったはずであるから。しかしのち淳が適塾にも学び、れっきとした蘭方医になったことはたしかである。なお次弟の孝治も別府で開業したが、希一と宏は勤王家として知られている。

(三) 武 谷 祐 之

さきに淡窓と洋学者との親交についてのべたさい、筑前の武谷元立についてもふれたが、元立の子祐之が咸宜園に入門したのは、天保七年(一八三六)のことである。その部分の『入門簿』が欠けているので、淡窓の日記『醒齋日曆』(巻一一)天保七年の項をみると、「二月十九日武谷祐之来調。居塾」¹⁷とあり、その日塾中入りをしたのであろう。祐之は文政三年(一八二〇)筑前国鞍手郡高野に生まれた。字は元吉、濃蘭、鷗州などと号し、のち椋亭と改めた。咸宜園では二

権九級下に至り、都講に任ぜられた。

天保一四年（一八四三）大坂の適塾におもむき、緒方洪庵について蘭医方を学んだが、帰国後、福岡藩主黒田斉博に召されて藩医となった。弘化三年（一八四六）『接痘瑣言』を作り、同志とともに牛痘法の普及につとめた。慶応三年（一八六七）祐之の建言により、藩医学校賛成館の落成をみた。このようにおなじく藩医であった父元立の志をついで、祐之も福岡藩洋学の発達に寄与するところが多かった。

淡窓から祐之にあてた書簡がいくつか残っているが、おそらく大坂遊学中の祐之あて年月未詳の四月二二日と七月一日付書信によると、大坂における旭荘の評判をしきりに気にして、祐之に善処方依頼している。この一事からも淡窓が祐之にたいして、洋学者以前の人間として、格別の親近感、信頼感をよせていたことが察せられるのである。なお『文稿拾遺』に「題「祐之稿」として、つぎのような祐之の詩と文にたいする淡窓の評言がのせてある。

諸体皆好。排律尤為美觀。輕秀流動。絶無牽合之痕。雖「老手」亦所難。

名章佳句、炯々輝目。予嘗云。詩能使讀者不倦。乃可稱名家。武生殆乎庶幾矣。文遜於詩。然亦条理整然。若加以二年之読書。養其學識。可與詩並立也。

門弟としての祐之への期待のなみなみでなかったことが察せられよう。

(四) 松下元芳

『入門簿』卷二三、文政四年九月十九日の条に筑後三潯郡久留米両替町松下元芳が稲垣元周の紹介で入門したとあり、さらに続編卷一一、天保一五年三月六日の条に同じく久留米両替町松下元芳一四才、飯田秀達の紹介で入門とでている。

「松下家系図」によってこれを吟味すると、さきの元芳はまさしく元芳の父養安にあたると思われるが、養安もはじめ元芳と名のつたらしい。それは『懐旧樓筆記』文政四年の項に「元芳ハ先師西洋先生ノ嫡孫ナリ。塾ニ在ルコト不レ久。

頗ル才氣有リシカ。今久留米ニ於テ声誉アリト聞ケリ」とあることによつても立証される。この養安の略伝は『久留米小

史』につきのように記されている。

松下養安ハ父ヲ寿庵ト称ス。世々我藩ノ侍医ニシテ、禄百五十石ヲ食ミ、竹間並格ニ班ス。義源公ノ病メル時、王人典薬頭百々陸奥守及ヒ蘭医小石拙翁ヲ招カル。養安ハ専ラ拙翁ノ説ヲ主張セシヲ以テ罪ヲ得、侍医ヲ免ス。然レトモ此時ヨリシテ漢方医ノ拙陋ニシテ為ルコトアルニ足ラサルヲ悟リ、弟牛島養朴・子元芳・済民等ヲシテ大坂緒方享庵ノ門ニ入り専ラ蘭法ヲ修メシム。元治二年正月十八日歿ス。年六十一。

これによれば、養安は小石元瑞（前述）の影響を強くうけて蘭医方に傾いていたようで、そのために藩医を免ぜられても、なおかつ弟や子の元芳らを適塾に入れて蘭法を学ばせたものとみえる。そこで蘭方医となった松下元芳の略歴を吟味すると、同じく『久留米小史』にその大要がのせてある。

元芳父ノ禄ヲ継キ侍医タリ。弱冠ニシテ広瀬淡窓ノ門ニ入り、又中島泰民ニ就キ蘭書ヲ学ヒ、後緒方享庵ノ門ニ入り刻苦勉強、深ク学理ヲ究ムルヲ得タリ。慶応年中江戸赤羽藩邸ニ在リテ、今井義敬英学校ヲ我藩ニ興スノ志アルヲ以テ官ニ建議シ、元芳ヲシテ福沢諭吉ノ慶応義塾ニ就キ英語ヲ学ハシム。初メ元芳ノ大阪緒方享庵ノ塾ニ在リシ時、諭吉モ亦同塾ニ在リ、元芳ニハ兄事セシナリ。今元芳慶応義塾ニ入ルニ及ンテソノ故ヲ以テ、専ラ賓客ヲ以テ待遇セリ。其塾中ニ在ル久シカラスシテ英語ニ通シ、帰リテ英語ヲ起スノ志ニテ官ニ請ヒ、英書ヲ数多購求シ帰国セルニ、久留米ノ形勢大ニ変シ、攘夷党跋扈セルヲ以テ、遂ニ其志行レス。諭吉元芳ノ才アルヲ以テ頻リニ出京ヲ促ス。且ツ長崎病院ヨリモ之ヲ招ケトモ、藩ヨリ出サシメス。明治二年十二月ニ歿ス。年三十九。其辞世ノ詩ニ曰ク、

出漢入蘭又学英。差吾強仕末成名。对鏡啞然還一發。鬢辺染出雲千。

みられるように、元芳の咸宜園入門はまだ弱冠一四才のことであつたから、淡窓の著述にもかれについての記述はすくなく、岡研介や武谷祐之の信任の厚さとは比較にならない。元芳の活動の場はむしろ適塾と慶応義塾であつた。適塾では塾頭をつとめたほど、緒方洪庵の信頼が強かつたことは、同輩の長与専齋の『松香私志』などにもみえるし、義塾で賓客

の礼をもって遇せられたというのも事実であろう。²⁶ ちなみに久留米市立図書館には元芳旧蔵の蘭書二十余冊が「松下文庫」の名のもとに収蔵されていることを付言しよう。

(五) 上野彦馬

上野俊之亟の三男として天保九年（一八三八）八月二七日長崎銀屋町で生まれた。嘉永六年（一八五三）吉岡晩成の紹介で咸宜園に入門した。このことは淡窓の『再条録』巻一にみえているので、淡窓晩年の門人である。ただし『入門簿』には一四才とあるが、これは数え年一六才の誤りであろう。私の調査ではいまのところこれ以上咸宜園や淡窓との関係の詳細はわからない。ただし木下逸雲が青邨にあてた書翰にこの間の動静がくわしく伝っているということである。²⁷

そこで彦馬のその後の事蹟を簡単に記すと、かれは父俊之亟とともに蘭学の造詣がふかく、とくに化合の研究にすぐれていた。元来、俊之亟は化合知識を応用して、時計製造・鍍金・製菓・長崎更紗等の製造のほか、大がかりな硝石の生産を家業の中心とし、長崎製硝所を経営していた。天保十一年（一八四〇）入港の蘭船がもたらした *Daguerreotype*（銀板写真機）を入手してから苦心研究の末、撮影に成功し、本邦写真術の元祖となった。

彦馬は咸宜園の課程を了えると長崎に帰り父の遺業をつぐために、和蘭通詞名村八右衛門（花溪）について蘭語を学び、安政五年（一八五七）長崎大村町の舎密試験所に入門、ここで写真術の研究にあたった。万延元年（一八六〇）渡来したフランスの写真家ロッシュエについて新技術を学びとり、間もなく津藩藤堂家に仕えて、藩費で舎密学の講義をし、文久二年（一八六二）『舎密必携』を著わした。その年致仕して長崎に帰り、上野撮影局を創業した。西南戦争には従軍写真師となって活躍した。明治三十七年六七才をもって病歿した。

咸宜園と洋学との関連性を明かにするため前章における淡窓らの教育方針と洋学観につづいて、本章では門人中の洋学者数人の動向に吟味を加えてみた。その結果、咸宜園自体は儒学を支柱とし、終始漢学塾としての立場を守りながらも、

日本の将来をきり開いていくうえで、洋学が圧倒的な役割になうであろうことを予見し、そのために知名の洋学者らと親交を結んで有為な門人らをそれぞれおくりこみ、洋学修業を依頼していることがあきらかとなった。門人で洋学者となつたものも、漢学より洋学への転向というよりも、高野長英がいつているように、むしろ咸宜園で読書・作文の基礎訓練をうけたのち、洋書を読解し翻訳文をつくることにメリットを感得したと思われる。

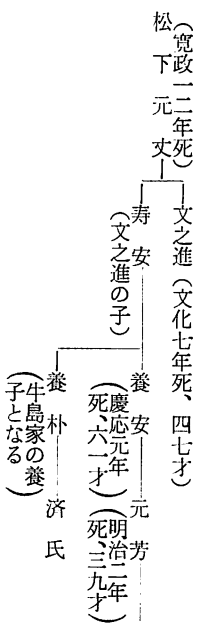
さらに咸宜園における儒学理論の思想的錬磨とその合理主義の習得が、洋学の論理の把握にとつて、一般にマイナスよりもプラスとしてはたらいだ度合いが多かつたにちがいない。この点は洋学全体についてもいえることで、なお充分な検討を要するが、咸宜園の教育方針が、固陋で閉鎖的な漢学塾とはちがつて開明的であり、近代システムの先駆的形態をそなえ、⁽²⁸⁾実学主義を標榜していたところから、洋学との連結が一そうスムーズにいったと考えられる。

註

- (1) 佐藤栄七『日本洋学編年史』による。
- (2) 高野長運『高野長英伝』二〇八頁。
- (3) 『淡窓日記』巻二二、文政二年四月十三日の条(『淡窓全集』巻下所収本一五八頁)に「研介入塾。於是書生居り熟者、凡三十人多^益。」とあり、『入門簿』巻九(『一全集』巻下所収本一四頁)の入門記事と合致する。
- (4) 淡窓の『文稿拾遺』(『一全集』巻中所収本三六頁)にのせた「岡子究慕誌」によると、「(子究)学三文於予及筑亀井氏」とある。
- (5) 『日本洋学編年史』四三六頁。
- (6) 同右、四七六頁。
- (7) 『懐旧楼筆記』(『淡窓全集』巻中所収)三五二頁。
- (8) 『広瀬淡窓旭莊書翰集』四四頁。
- (9) 『淡窓小品』(『淡窓全集』巻中所収)五頁。
- (10) 『遠思楼詩鈔』(『淡窓全集』巻中所収)二八頁参照。

- (11) 『文稿拾遺』(『淡窓全集』卷中所収) 八頁参照。
- (12) 『洋学編年史』四三七頁所載。
- (13) 同右(同右所収) 三六頁。
- (14) 『入門簿』(『淡窓全集』卷下所収) 四九頁。
- (15) 『懐旧楼筆記』(『淡窓全集』卷上所収) 一九七頁。
- (16) 『淡窓旭莊書翰集』二三四頁。
- (17) 『淡窓全集』卷下、五九八頁。
- (18) 『懐旧楼筆記』(『淡窓全集』卷上所収) 四七三頁参照。
- (19) 井上忠『種痘法の伝搬過程』(『西南学院大学文理論集』昭和三二年度) 参照。
- (20) 『淡窓旭莊書翰集』二〇八〜二〇頁参照。
- (21) 『文稿拾遺』(『淡窓全集』卷中所収) 五〇頁。
- (22) 松田豊『陶山、松下両医の遺書解題より米藩洋学の経路に及ぶ』(『筑後』一五の二、昭和二年) 所載。

松下家系図(略図)



- (23) 『懐旧楼筆記』(『淡窓全集』卷上所収) 二六四頁。
- (24) 戸田乾吉『久留米小史』卷二、一四丁表。
- (25) 同右、裏。
- (26) 松下元芳については合津健治「久留米の蘭学者松下元芳について」(蘭学資料研究会『研究報告』二二九所収)を参照。
- (27) このことは梅本貞雄「上野俊之丞と上野彦馬―本邦写真術の開祖―」(蘭研『研究報告』五五、所収)にでているが、筆者は

未見。なお彦馬の事蹟については右論稿に拠るところが多い。

(28) 前掲、中島市三郎『教壇・広瀬淡窓の研究』第五淡窓先生と明治学制、参照。

四、広瀬家先賢文庫所蔵の洋学関係写本

今日広瀬家所蔵の文献史料としては、同家先賢文庫にきわめて多数の同家先賢遺稿と手記本(大部分は写本)、咸宜園旧蔵写本・経営関係文書が収蔵されており(目下整理中であるが、なお書籍・書簡等は未整理)、相当数の刊本類が日田市立咸宜園図書館に寄託されている。^①書籍の大部分は漢籍と国文学書であるが、なかに百数十点の洋学ないしは対欧米関係書類がふくまれている。刊本は一応除外して、関係写本を適宜分類して書名ならびに著者名、冊数、印記、句読点、傍点、傍線、書入れ等を列記してみると、つぎのとおりである。

(一) 理数

窮理通半、二冊、帆足万里著、宜園蔵書印・日益月加印、無尽蔵、黒・朱字句読点・朱字傍点多数、書入れは少

々、外国地名・人名等の読み片仮名を付す。

泰西水法半、二冊、明、熊三拔撰説、徐光啓訳、石川文庫印、ISIKAWA BEHORDER DATBOEK TOE

印、句読点、頭註に朱・黒字誤字訂正、図に朱字註

算法覚書大、一冊、宝曆六年子三月の表記のある和算書、洋学の影響はない

(二) 医学

青囊秘録半、一冊、華岡青州著、書入等なし

方法秘鑑口訣大、一冊、書入等なし

精選方口訣半、二冊、書入等なし

咸宜園と洋学(杉本)

- 療痔録（上巻病論治法、下巻藥方器械） 大、二冊、岡研介著、（自筆）朱筆訂正多し
傷寒論首解 半、一冊、田代連公山著、夥しい附箋を付す、大乙堂旧蔵
傷寒論一証便宜 半、一冊、田代連公山著、夥しい附箋を付す
地誌

輿地誌（略） 大、七冊（三冊欠）、青地林宗訳、旭莊珍藏印、傍点各処にあり

職方外記 大、二冊、艾儒略 Giuglio Aleni 著、中島豊足印、朱筆訓点、字句訂正、卷六の末尾に「文政元寅三月門生奥州松前人齋藤豊自をして之を書写せしむ、中島豊足印」とあり

訂正采覽異言 大、一三冊（第一冊欠） 山村昌永増訳、旭莊珍藏印、朱字句読点・傍点、黒字書入れ多数、頭註増補
に「明史」・「度数譜」より引用、とくに卷五利未亜等に多し

魯西亜誌（帝爵魯西亜国史） 半、四冊、和蘭勃盧堙爾撰、馬場貞由訳、旭莊珍藏印、書入等なし

釣遠探隠要録 半、三冊、旭莊珍藏印、諸処に朱字句読点あり

（四）漂流記

水夫漂流記（内題、水夫仁平漂流日記） 半、一冊、林洞海著、旭莊珍藏印、書入れ等なし

漂流安南記（一名、南瓢記） 半、一冊、（枝芳軒著）旭莊珍藏印

（文化元年子九月）並奥州漂流人一件 半、一冊
（魯西亜人入津）

北樵聞略 大、四冊、桂川甫周著、旭莊珍藏印 朱字傍線、頭註少しあり

魯敏孫漂流荒紀事 半、三冊、啖咭喇因魯敏孫嚙瑠須著、黒田行大道（麴廬）再訳、書入れ等なし

（五）歴史（西洋雜）

西洋列国誌（西洋列国史略） 半、一冊、佐藤百祐（信淵）著、旭莊珍藏印、書入等なし

那波礼温略伝 半、一冊、旭莊珍藏印、三頁にわたり頭註書入れあり

西洋雜記 半、二冊、山村才助著、旭莊珍藏印、末尾に「干時文化六年己巳二月十八日阿州眉山の居士藤原

邦貞誌」とあり

万国雜抄 半、二冊、「万国伝信紀事」をふくむ、書入れ等なし

(六) 海防・軍事

海曲蟲語 半、五冊、安政元年十二月太政官符、幕府教令、附言（安政二年藤原保定）、書入れ等なし

籌海私議 半、一冊、（塩谷）宥陰未定稿、旭莊珍藏印、朱字句読点あり

獻芹微衷 半、一冊、大槻盤溪著、旭莊珍藏印、朱字句読点、傍線あり

擬論海防 半、一冊、板倉勝明著、書入れ等なし

三国通覽(図説) 大、一冊、補遺二巻を付す、林子平著、朱字・黒字頭註、朱字傍点若干あり、巻末に「右三国通

覽補遺二巻得諸攤買慶書中不知為何人作、其説頗有捩、但誤訳不少、文字亦訛、今為加訂正、読之亦可以見概略云、宝壺老人閱完、因題丁卯中元日」と記す

北辺紀聞 大、一冊、文化八年辛未夏蝦夷地江魯西亜人渡来一件・辛未魯西亜書簡和解（馬場佐十郎）・久

奈志利記等八編の文書より成る、朱字書入れ多数あり

西洋秘套 半、一冊、夢物語（朱字傍書あり）・夢物語批判・西洋群議・慎機論・夢々物語・刑書等蛭社遭

厄関係書より成る

鎖國論 半、一冊、ケムベル著、志筑忠雄訳、固有名詞に朱字傍線を引く

日本紀事抄（西客堅協鹿日本紀事第四編抄訳） 半一冊、ケムベル著、高橋景保訳、旭莊珍藏印、書入等なし

俄羅斯武備誌 半、一冊、旭莊珍藏印、魯西亜国兵勢并合編之事六カ条、陸兵之事一二四カ条より成る、書入れ等

なし

陸戦秘訣 半、一冊、佐藤椿園（信淵）著

(七) 阿片戦争

鴉片章程 半、一冊、書入れ等なし

鴉片始末附考異 半、一冊、仙台、齋藤馨子徳（竹堂）著、周芳、清狂方外史考異、一節ごとに考異を掲ぐ

鴉片招禍録 半、一冊、頭註朱字書入れあり、千八百三十八年より四十二年までの和蘭風説書より所る、字句の註釈多し

清朝討英夷檄文 大、一冊、清、金大理、旭莊珍藏印、書入れ等なし

唐人答書（付外船接近） 半一冊、問嘆咭喇唐生意情形稟覆干左等の文書、付録に日向国福島都井浦に接近の外船

一件を載す

(八) 風説書

風説類数種 半、一冊、安政三辰年九月、亜米利加官吏の差出候横文字和解差上候儀申上候書付・霜台丙辰察

議・辰年（千八百五十六年）（安政三）別段風説書より成る

風説類合本 半、一冊、信州松代地震関係文書・蒸気船「ゲーデ」出島千八百五十五年九月二十七日付、日本

差越候指揮役船將次官グフェビユス書翰等より成る

別段風説書辰七月 半、一冊、千八百五十五年の記事

和蘭告密附夷船一件 半、一冊、千八百五十六年、差越どんくるくるきゆうす書翰和解・辰八月伊勢守御渡

雑書 半、一冊、安政四年二月長崎入津之唐船より差出候風聞書写、千八百五十七年二月差越別段風説

書のほか加藤清正に関する文、かけ弁慶を綴り込む

（交易仕法）

英吉利紀略 大、一冊、紀略は清陳逢衡著、風説書は表題なく、太平天国乱を記述、巻末に「此二本嘉永七甲
西土風説書 寅十一月借、出雲松城儒官妹尾精齋而写於錦織氏」と記す
星槎異聞 半、一冊、甲辰年和蘭国王書簡并献上物目錄和解、弘化二年六月朔日、老中より和蘭政府への反

翰より成る

(九) 合衆国

合衆国書翰 半、一冊、亜美理駕大合衆国大統領、同水師提督の書翰和解七通より成る

合衆国書翰和解 半、一冊、右と大体内容同じ

亜墨利加使節申立之趣 半、一冊、十月廿二日備中守宅におゐて亜墨利加使節申立之趣、亜墨利加使節対話書、十

二月四日亜墨利加使節差出の書附和解、近日雜報○出游外国論紀元一千八百五十年三月○第三号

亜魯英仏四協約翻訳和解 半、一冊、外に内藤紀伊守殿御渡候御書付写等七通の文書写を綴り込む

新聞紙

〔亜墨制加通詞官

ホットメン内密申上候書和解

寅十二月豆州ニ而某筆記

ものは附三月御触并諸家々御届

嘉永七年八月豆州下田表江アメリカ船渡来通詞官ホットメンより内密申上候横文字和解、安政元年十二月豆州ニ而某筆記（一種の風説書）ものはつけ、その他合せて七通の文書を綴り込む

レイソイヤッパン附英吉制人片仮字文 半、一冊、外国人日本通商乃企亜米利加人当今日本へ志望の事を載たる公願
(朱 字)

乃告牒記録の事等、末尾に「右エゲレス板評判記ニ添テアリシ片仮名文ナリ」とあり

つぎに参考までに先賢文庫もしくは咸宜園図書館収蔵の洋学関係刊本を列挙するとつぎのとおりである。

(一) 地理

坤輿図 識正統 九冊、箕作寛（省吾）著、弘化二年刊

地理正宗 八冊、杉田玄端訳、嘉永三年刊

瀛環志略 一〇冊、清、徐繼畲著、井上春陽等訓、文久元年刊

童絵万国断 六冊、仮名垣魯文著、五齋芳虎画、万延元〜文久元年刊

(二) 天文・物理

天経或問 一冊、明、游子六著、一六七五年刊

初学天文指南 五冊、馬場信武、宝永三年刊

気海觀瀾 一冊、青地林宗著、文政一〇年刊

(三) 海防・外交

海防彙議 三三冊、塩田順庵編、安政元年刊

遭厄日本紀事 一四冊、兀老尹^{ゴロイヤン}著、馬場佐十郎・杉田予（立卿）・青地林宗合訳、文政八年刊了

環海航路日記（庚申亜米利加紀行） 二冊、広瀬保庵著

(四) 西洋雑

西洋車図会 一冊、長谷川小信画

西洋事情 三冊、福沢諭吉著、慶応二年刊

五雑組 八冊、明、謝肇淛著、寛文元年刊

六合叢談 八冊、原名 Shanghai Serial (1857・1〜58・2)、官版

さて右の広瀬家所蔵の洋学・対外関係書類の傾向（写本・刊本をふくめて）を概観すると、海防・軍事に関するものが

一番多く（一三部）、つぎが地理（九部）で、以下風説書（七部）、合衆国（七部）、医学（六部）、理数（六部）、漂流（五部）、阿片戦争（五部）、歴史（西洋雜、七部）となっている。このコレクションで特徴的なのは、蘭語や英語などの洋書もしくは語学書の類がまったく欠如していることである。この点、咸宜園では当然のことながら語学の研究はおこなわれず、洋学知識はもっぱら著訳書によってもたらされていたと想像される。そして海防・地理の書がもっとも多く、さらに風説書や合衆国関係文書がこれにつぐことは、幕末期における咸宜園の時局認識の一端をしめすものと考えられる。とくに一般には入手がたい風説書や外交文書が手にはいったのは、広瀬家・咸宜園が西国那代と密接な関係をたもっていたことと、後述するように旭荘の苦心してつくった特別のルートによったものであろう。

しかし咸宜園ないし広瀬家に洋学・対外関係書が多数残存しているからといって、それだけで特定の誰かが何時どの程度研究したかという事実をひきだすことは容易ではない。もっとも新しい学校制度のなかで蛮学＝蘭学の一科を設ける必要を提唱し（実現はみなかったが）、さらに知名の蘭学者とよく連絡をとって門人たちをそれらの蘭学塾におくりこみ、洋学への関心のなみなみでないことをしめした広瀬淡窓自身の手記本もあるかと思うが、いまのところわたくしにはその証左はつかめていない。さきにものべたように、淡窓が当時禁制のキリスト教教義書『三山論学記』などを岡研介から借覧し、騰写したことなどにも、その外来文化にたいする見識のほどをうかがうに足るものがあるが、残念ながらその写本は残っていない。

しかしたとえば『泰西水法』のごとき、熱心に研究されたあとが歴然としており、とくに挿図に朱字の註が細記されているのは、淡窓も強い関心をもち、次第久兵衛が実践にあたった広瀬家のすぐれた治水術と無関係ではないように思われる。

ところで前掲写本のなかには、「旭荘珍藏」の印記のあるものが一五部ほどふくまれている。これは早く大坂・江戸方面にでて活躍し、幕末志士たちとも関係のあった広瀬旭荘が蒐集したものと考えられるが、このことに関して旭荘の書簡は、つぎのような事実を伝えている。

嘉永（安政年間）とみられる謙吉（旭莊）から大人（淡窓）にあてた二月十三日付書簡によると、

一、外国之事坤輿図誌之外写本にて手に入兼候。私千辛万苦所集数十百冊、不遠帰省之時可携帰、何卒今の内より筆工二十人計仕立置被下度、日記も大凡三十冊程出来候。

一 同持帰滞留之由為写度預入申上置候。

つぎに嘉永五年閏二月余日付旭莊より青邨へあてた書簡には、

一、西洋書類一日も早く御返却、右ハ小生困厄中より数百金を抛て集候故甚珍重候。箱ニ入れ御送可被下、耳損し候事大畏候³

さらに安政三、四年ころとみられる二月七日付、謙吉より青村^(傳)あての書信にも、

一、唐人の書一卷入手、去年八、九月迄の事有之誠ニ大変也。朱氏ハ形も無之、洪秀泉と申者張本、南京ニて帝と稱シ、清の罪ヲ数ル詔書ニ通愉快也。其外珍書英魯墨の一件五冊入手、当時府内邸ニ為写候。其内南兄方ニ可往、其時御写可宜候。皆奥右筆の手より出候分也。秘々⁵。

とある。右のうち第一の書翰は、旭莊が外国関係書を苦心惨胆して蒐集し、それが数十百冊に達したが、帰省のおり大坂から日田へ持ち帰る所存なので、あらかじめ筆工を用意しておいてもらいたいと淡窓に依頼しており、第二のものは旭莊珍藏の西洋関係書を速急にしかも大切にあつかって送り返してほしいと頼んでおり、最後のものは長髪賊の乱に関する中国人の書と英露米関係の書類を入手したから、いずれそちらでも写すようにと指示しているのである。なお唐人の書とは前掲『清朝討英夷檄文』か『唐人答書』かを指すものと思われる。さらにそうした秘書の類を幕府の奥右筆からのルートで入手したことで付加しているのも注目をひく。いずれにしても「旭莊珍藏」の印記のある書類が、旭莊の苦心蒐集したものと推定して、まず間違いないまい。しかもこれは洋学関係書の全体にも該当することであるが、傍点、傍線、書入れ等によって、相当によく熟読され、研究されていることが察せられるのである。

それでは旭荘は何故このような熱意をもってこうした書類を集めたのであろうか。この点についても、旭荘の書簡がこれ自身の心境をあざやかに語っているので、二、三を例示しよう。

一、江戸の方洋学流行候。唐の歴史而已ニテハ史家と不可謂。五大州の事を成丈吟味致度物也（安政二、三年七月一日付青村あて）⁶⁾。

洋学は如日升。程朱学も林家及梅田（無類の朱子学）評判甚不好（安政五年一〇月一日付青村・林外あて）⁷⁾。

一、蘭学ハ前代未聞、詩文等ハ先弘地候。万巻の書を誦候ても、蟹行之文字を不知候ては、活計には成兼候勢（安政七年七月一日付あて名なし、多分青邨・林外あて）⁸⁾。

そこには「中華」だけでなく、ひろく五大州にむかって眼を開くべきことを説き、そのためには旭日ののぼるがごとき洋学興隆の機運に棹さして、横文字を知らなくてはもはや「活計」にもさしつかえるにいたったとする深刻な感懐がこめられている。幕末に近づき、漢学とくらべて洋学の優位がいよいよ明確になってきた、歴史の容赦のない変転ぶり（必然性）にたいする旭荘ののっぴきならぬ認識が浮彫にされているではないか。

こうした認識のもとに、洋学に強い関心をもった旭荘は、当然にもヨーロッパの地理書・歴史書の翻訳を涉猟し、彼我の比較のうえに立って海防を論ずるにいたるのであるが、その方面のまとまったかれの論著としては、「識小編」⁹⁾、『梅墩叢書』¹⁰⁾ 坤、所収」と「異船議」¹¹⁾（同上、乾、所収）二小篇がある。これらは開港前後の緊迫した危機観のもとに記された時局認識であって、英仏等西洋諸国の侵略をまぬがれるためには、まず人材を登用すべきことを提唱するとともに、防禦手段としては大砲・大船・焰硝を造る術を進めるほかないことを力説した献策である。

しかしこのほか「児孝ニ示ス書」¹²⁾には歴山王（アレキサンドル大王）・伯徳緑（ペートル大帝）・那波列翁勃那抜兒的（ナポレオン・ボナパルト）・話聖東（ワシントン）等英雄の事蹟を記して論評を加えているし、『九桂草堂隨筆』の巻之五・巻之六には、「大莫臥兒は民口一億四五千に余る由」・「魯西亞の盛なるは伯特祿の時より始る」・「今は洋夷と交通の

こと起れり」・「今迄の頑固なる習風を變じ云々」・「西洋の書を研究せざるべからず」・「蒸気船の工夫をなさしめば云々」・「漢人は迂洋人は捷なり」・「異国の戦には大船を造」・「洋人の我邦に上る文頗る倨る」・「亜墨利加今は天下を官にする風あり」・「那波礼翁徳量なきことを知べし」といった知見がのせてある。また旭荘の浩翰な日記『日間瑣事備忘録』にもしばしば西洋ないし洋学関係記事が散見する。それらを一覧すれば、旭荘の西洋認識が当代の儒者・漢詩人中では傑出していたことがわかる。

しかし本稿では旭荘の対外認識や海防論に深入りする余裕はないので、その詳論はあらためて他日を期したいと思うが、旭荘の洋学観をここに約言するならば、結局儒者の立場からの「採長補短」の域をいえず、「東洋道徳、西洋芸術」観を堅持するものであった。ただそうした制約内では、旧弊にとらわれない自由濶達で、しかも合理的な言説をおこなひ、ままた卓見の閃きをしめしている。

旭荘のこのような洋学観は、長兄淡窓の洋学観を継承し、敷衍するものであったが、淡窓と異なるところをあげるならば、時世が一層切迫した幕末期に、京坂を中心に活躍し、坪井信道・岡研介・青木研蔵らをはじめ、大槻磐溪・新宮涼庭・高島秋帆・佐久間象山・鈴木春山といった当代一流の洋学者とも親交があり、また国事に奔走した志士たちとの交友関係も浅からざるものがあったため、切実な危機観の裏づけがあり、しかも開港後の内外情勢の急展開によって、一層豊富な洋学知識を身につけざるをえなくなったことにある。以上のような事情を考慮にいれるならば、広瀬家先賢文庫中の上述の「旭荘珍藏」本の存在理由について、一応的確な理解をもつことが可能になると思う。

そこでこの節の本筋にもどり、最後に広瀬家洋学関係書のなかにふくまれている咸宜園門下生の著述について一応の吟味を加えたい。といっても管見にはいったものは、岡研介著の『療痔録』と林洞海著『水夫漂流記』の二部だけである。

そこでまず『療痔録』からみると、これは書目にも記したとおり、「療痔録病論治法卷之上」と「療痔録藥方器械卷之下」の二卷二冊から成り、二二枚の小冊子である。上下巻ともに冒頭に「周東 岡研子究著」と明記され、おそらく研

介の自筆本とみられる。表紙もない仮綴で、罫紙に楷書で認められ、漢文で記されているが、全部にわたり返り点と送り仮名がつけてある。目次は、上巻が肛門第一、痔瘻第二、曾痔第三、脱肛第四、痔血第五、下巻が藥方第六、器械第七で、全体が七章から構成されているわけである。いかにも草稿といった感じで、いたるところで朱字の訂正が加えられ、下巻にはとくに黒字と朱字の頭註が一つづつある。

内容の検討は医学の専門にわたり、その任でないので、さしひかえるが、幸い下巻末尾に本文とは別の字体でつぎのような論評がのせてある。

書療痔録後

文政戊寅之季秋療痔録稿成矣。於是乎、曷得受焉。蓋此書之所記、捩西洋実説、加以自己之試験。雖葺甫方法兼備、略無遺漏。実黒眼之昏暗、自今懸明鏡也。希令世之未達焉者一見、則亦為暗夜之燭邪。是黒之微意也、作者之本志也。

この評言を書いた黒とはたれか未詳であるが、これによって、まずこの書が文政元年晩秋の作であることが知られる。研介が咸宜園に入門したのは文政二年の四月であるから、それより半年ばかりまえの研介二〇才のときの作である。しかもこの書の執筆時には、かれはすでにオランダ医学を一応身につけていたこと、痔の治療書としてはそれまでにない画期的な作であったことが、この評言からわかる。従来研介の著述は、『老子註』・『周礼解』・『天造堂漫筆』など漢字書のか、蘭書訳訳に『生機論』と『蘭説養生録』がある程度で多くを伝えなかつただけに、¹⁴広瀬家所蔵のこの書は、かれの著述目録に新鋭の一書を加えることになり、まことに貴重な存在といわねばならない。

つぎに『水夫漂流記』にうつる。広瀬家には漂流記が五部一〇冊も現存するが、そのうちもっとも珍奇なのがこの書物である。本書は内題に「水夫仁平漂流日記」とあり、「林洞海編著」と明記してある。現代教養文庫の『日本人漂流記』（昭和四二年）の著者川合彦允氏の御教示によると、この漂流のケースは従来から知られているが、林洞海編著のこの書は未見とのことなので、簡単に内容を紹介する。

肥前国佐賀宮ノ町竹富熊吉の持船、千五百石積一七人乗の権現丸は米を積みこみ、弘化三年（一八四六）七月一三日同港を出帆したが、九月二五日ごろ江戸品川沖に着船、米は深川貸蔵に収め、江戸からは空船で一〇月一〇日ごろ浦賀を出帆し、志摩浜島でアラメ五六百石を積みいれ、十一月一〇日ごろ同所を出帆した。ところが同月二日ごろ紀州比井ノ岬で暴風にあい、漂流して越年、三月二〇日ごろ生残りの四人が外国船に救われ、四カ月間同船上ですごし、六月末奥州盛岡領野田の大田辺海岸に送り届けられた。その間の漂流の顛末と外国船内の状況や水夫仁平らが習い覚えた英単語等を筆記編纂し、最後に漂客の言をもとに漂流図と外国船の図を作つて掲載、この船を米国の捕鯨船ならんと推察している。

ところで林洞海は豊前小倉の出身、文化一〇年（一八一三）の生まれであるが、天保三年（一八三二）江戸にでて、足立長傳の門にいり、西洋医学を修めたのち、佐藤泰然とともに長崎に遊学、間もなく江戸に帰り（天保四年）、薬研堀の泰然の旧居をつぎ、医業を開いたが、嘉永三年（一八五〇）にいたり小倉藩医にとりたてられた。淡窓の門を叩いたのは何時ごろかいまのところ未詳であるが、おそらく天保三年江戸にでる前のことであろう。上述の漂流事件は弘化三、四年のことであるから、この漂流記の成立も小倉藩医時代であると思われる。したがって咸宜園とは岡研介の前記の著述のような直接のつながりはないかもしれないが、やはり小倉領漂流民の事件を、藩に禄仕した時期にとりあげたのであるから、海防問題にも関心のふかかった淡窓や旭荘とも何ほどかの連絡があり、一本を多分旭荘に贈つたものと推定される。

「異船語」としてかがけた英単語の発音も、水夫仁平からの聞書であるからきわめて不正確ながら、とにかく耳で聞いた五二の日用単語を書きとどめているし、「興地図ニ拠テ其漂流ノ行程方位ヲ考フルニ」として、漂流の路程を南は北緯一五度の南洋（ガロリン諸島）、北は北緯五〇度近くのアラスカ南方、東は米本土のアラッテリー・ウハンユウフル？付近と推定して漂流図を作成していること、漂流民を救助してくれた外国船を、「共和政治州（アメリカ合衆国）」の捕鯨船と推定して船形を图示し、「然レトモ皆是余カ推量ノ憶説也……具眼博覧ノ君子参互考訂セハ或其何ノ国成事詳定スベシ」と結んでいるところなど、蘭学者林洞海の力量を存分に發揮しているのをみることができると推定される。

北部九州における類似の漂流記としては、かつてわたくしも検討した筑前の洋学者青木興勝著『南海紀聞』（寛政六年以前脱稿、文政三年刊行、五卷）をあげることができる。¹⁵この書物は明和元年（一七六四）南海に漂流して数年をボルネオ島で過ごし、同八年（一七七二）長崎に帰還した筑前糸島郡韓泊の水主孫太郎の数奇な漂流譚を興勝が筆録し、按文をつけて世界地理学や博物学の知識をもって考証を加えたもので、漂流記中の異色編である。『水夫漂流記』はこれほど興味ぶかいものではないけれども、これまでその道の専門家の間にも知られていなかったとすれば、それだけでも貴重な文献といってもいいと思う。

林洞海はのち幕府の医官に抜擢された人で、著書として『窠篤児薬性論』は有名であるが、『魯西亜本紀』・『北米合衆国考』等（何れも未刊）の世界地理書も著わしているから、漂流譚にも強い関心をもっていたことは、当然考えられる。しかも当時日本近海にさかんに出没し、開港の一導火線ともなった米捕鯨船の内情の一端を伝えている点、一層注目に値するであろう。

註

- (1) 拙稿「豊後日田の広瀬家史料の調査によせて」（『日本歴史』二七二号所載）参照。
- (2) 本稿二、九五頁参照。
- (3) 『広瀬淡窓旭莊書翰集』四一八頁。
- (4) 同右、四八八頁。
- (5) 同右、四九二頁。
- (6) 同右、四五四頁。
- (7) 同右、五九〇頁。
- (8) 同右、六一二頁。

(9) 黒船の浦賀来航のさい、慨然として幕府に献じて、憂国の至情を披歴したものと云われるが（橋爪兼太郎『広瀬旭莊』三七頁）、旭莊の弘化五年（八月二十五日）の書翰（『広瀬淡窓旭莊書翰集』三八〇頁）によれば、「此本ハ府内公ニ呈し度云々」とある。

(10) 未刊本、広瀬家先賢文庫所蔵、なお年月日不詳の旭莊より青邨あての書状（『一書翰集』四九三頁）によると、「梅墩集」も奉行所にて再吟味とさり、旭莊の幕末経世論著が安泰でなかったことを物語っている。

(11) 『梅墩叢書』乾、所収。

(12) 国書刊行会本『百家隨筆』第一所収本七〇九頁、目錄参照。

(13) 『日本洋学編年史』四四三頁参照。

(14) 同右、四四五・四五五・四八二・四九六・五三二各頁参照。

(15) 拙稿「筑前蘭学事始考―青木與勝の事歴を通じて―」（『九州文化史研究所紀要』一二所収）五一―六一頁参照。

五、む す び

咸宜園と洋学との関係について、研究の出発点は(一)広瀬淡窓の教育方針と(二)これにもとづく門下生の洋学習得過程の追究にあったが、(一)の淡窓の洋学受容思想はともかく、(二)の全門下生にわたる検証は至難の業で、本稿ではわずかに史料のうえで立証可能な岡研介・松下元芳・矢田淳・武谷祐之・上野彦馬の五人に絞らざるをえなかった。ところで広瀬家所蔵文献の調査・整理の進捗につれて、筆者の関心は選びだした洋学関係書類にむけられたが、その面でも門下生関係書として、わずかに岡研介の『療治録』と林洞海の『水夫漂流記』しかみあたらず、この場合の問題の核心はむしろ広瀬旭莊の洋学研究にあることを知った。しかし旭莊の習得したものは世界地理・西洋史の翻訳知識の程度であって、しかもいわゆる漢学者による「採長補短」式の摂取というよりは、むしろ幕末内外危機に直面したかれの時務的な認識であり、志士的な立場からの受容であった。開港後の外交関係文書の残存なども、そのような意味で納得できるように思う。

とはいえ、本稿は筆者のこれまでに調査しえた範囲内での一応の成果報告であり、旭莊関係史料（たとえば『日間瑣事

備忘録』や書簡類)の検討もまだ充分でなく、したがって旭荘の洋学思想・海防思想を掘りさげることにはできなかった。本稿の諸構成要素が渾然と結びあうためには、なお一層の調査研鑽を必要とすることを痛感しつつ、この序説的な論稿の筆をひとまずおくこととする。

Kangien (咸宜園) and the Western Learning

Isao SUGIMOTO

This monograph is a report on the results obtained by my research about the relations between *Kangien* and the Western Learning (洋学). *Kangien* is the private school established by Tansō Hirose. This research forms a part of my synthetic studies on Hita and its environs (in *Bungo-no-Kuni*), which were the domain of the Tokugawa Shogunate. This private school became famous by the liberal and broad-minded educational principles, and the number of Tansō's pupils gathering from all over the country reached to four thousand. It was the latter days of the Tokugawa Government and so we can estimate that many of those pupils opened their eyes to the Western Learning in accordance with the needs of the times. Therefore the relations between the Western Learning and *Kangien*, the private school of Chinese classics, was more intimate than was expected. Tansō himself had a deep understanding of Western Learning. But we can not certificate by historical materials many of those who later became pupils of Western Learning. In this monograph I cleared up the relations between *Kangien* and such pupils as Kenkai Oka, Genpō Matsushita, Jun Yada, Yūshi Takeya, Hikoma Ueno and others. Today in *Kangien* (the Hita City Library) we can find only several publications (including no Western book) pertaining to the Western Learning. But the Senken-bunko (先賢文庫 Library of Old Wise Men) has considerably numerous manuscripts pertaining to the foreign relations and the Western Learning. Some of these manuscripts have the seal of Kyokusō Chinzō (旭莊珍藏 Precious Manuscripts collected by Kyokusō). Kyokusō is the youngest brother of Tansō. He led *Kangien* for a time after Tansō. These manuscripts were collected by Kyokusō's painstaking. The Senken-bunko mostly consists of the translations of world geography and occidental history, and manuscripts relative

to the coast defense, military preparations, England and U.S.A. These collections themselves indicate the intimate relations with the tendency of thought of Tansō and Kyokusō. As the manuscripts relative to pupils I found only "Ryōjiroku" (療治録 A Record of Medical Treatment) of Kensuke Oka and "Suifu-hyōryū-ki" (水夫漂流記 A Record of Drifting of Sailor) and so I introduced them. But Kyokusō's voluminous diary ("Nikkan-saji-bibōroku 日間瑣事備忘録 Memoirs of Daily Trifles) and immense letters relative to Tansō and Kyokusō are not yet, completely investigated.

If these materials are minutely studied, it will be possible to probe more deeply into this problem.